

フレッシュャーズ・セミナー
「いのちの倫理と生きる意味」

伊 藤 悟

1. 本セミナーのねらい

このテーマでのセミナーを始めて5年になる。以前には異なるテーマのセミナーを開講したこともあったが、「いのち」への取り組みは、担当教員の問題意識と学生の関心とがよくマッチした、両者にとって刺激の多いテーマであり、改善を試みながら継続展開をしている。

本セミナーはまず、そのねらいが達成されるよう履修学生20名を選定することから始まる。できるだけ動機付けの高い学生を選考したいため、初回の授業ではセミナーの概要説明ののち、志望動機や「いのち」への関心についての簡単な予備調査を行う。そこに記述された内容に基づき、担当教員が男女、学部のバランスを考慮して20名を決定していく。予備調査では志望動機や抱負のほか、たとえば次のような設問を用意し、可能な範囲で記入してもらう。

- 最近とくに興味・関心を抱いている生命倫理に関するテーマ
- これまでもっとも「いのちの美しさ」を感じたとき
- これまでもっとも「いのちのはかなさ」を感じたとき
- 最近の生殖医療をめぐる諸問題について
- ボランティア活動の経験
- もし「幸せ」を定義するなら・・・

セミナー参加への意欲といのちへの関心をできるだけ高くもっていることを要求したいが、その理解や方向性はバラエティに富んでいるほうがセミナーとしては面白い。記述された文面からだけで、その後のプレゼンテーションやディスカッションの展開をすべて推測することはできないが、担当教員はこの予

備調査によって、ある程度のセミナーのイメージを作り上げていくことになる。

『講義要項』（シラバス）には、「授業の到達目標及びテーマ」として次のように掲載している。

人類は、いのちを軽視し、いのちを奪い、いのちを商品化する歴史を繰り返しています。今もなお、いのちの価値とその意味を見出せずに、また、いのちの起源もその方向性も見失ったままに、ただいのちが費やされています。いのちが浪費されているのです。殺戮、戦争、自殺、虐待、DV、堕胎、死刑、拷問、貧困等々、枚挙にいとまがありません。肉体的いのちだけではなく、心のいのちの争奪戦も繰り広げられ、私たちの周りではどんどん生きるのが難しくなっているように感じます。ほんとうは生きる意味や価値を真剣に考えてみたいのに、そんなことをまともに考えること自体が馬鹿馬鹿しく思われたりもします。このセミナーでは、とくにキリスト教の視点からのアプローチも加えながら、現代人が直面している様々ないのちの問題と生きる意味について考察し、いのちの閉塞状況の打開を試みようと思います。

いのちの問題に関心をもちながらも、話題にすることへのためらいや受験準備といった制約のなかで、考えたり語ったりする機会を持てずにきた学生が意外にも多くいる。諸課題についての概略的な知識があっても、残念ながらそれが生き方や倫理観を構築させる力にはなっていないし、深刻な話題は忌み嫌われるからといって口に出すことを躊躇する傾向もある。このセミナーでは、いのちを話題にすることは何ら憚られることなく、むしろそれを望む者が集まっているという前提を確認し、いのちに正面から向き合うことにチャレンジする。いのちの現状を知ること、問題点を明らかにすること、それに対する自己の感情を引き出すこと、それを現実と対峙させること、そして課題を整理して何らかの道筋を提起することまでを目指している。

もとより「いのち」と仮名表記しているのは、ギリシア語のビオス（bios＝生物としての命）だけではなく、プシケー（psyche＝心理的・社会的な命）やゾーエ（zoe＝霊的いのち）をも含めた人間の「存在」と「意味」の全体像を問題にしたいからであり、「いのちの倫理」はいわゆるバイオエシックスと同義ではない。またキリスト教的人間観からすれば、「いのちの倫理」は人間の経験の積み重ねや多数意見によって決定づけられるものではない。人間の内にあるモラルすなわち人間の意志や知性と、人間の外にある人間や文化を規定するものの両者に由来する。つまり下からの倫理と上からの倫理の緊張関係の中に構築されるものとして解釈されるのである。学生たちにはそうした「いのちの倫理」の様々な次元について考察してほしい。

2. セミナーの実際

このセミナーは、おおよそ次のような授業計画で進められる。

第1回	オリエンテーション、予備調査
第2回	講義①「生きる意味と価値」（ディスカッション）
第3回	講義②「いのちの閉塞状況」（ディスカッション）
第4回	講義③「いのちの公共性」（ディスカッション）
第5回 ↓ 第13回	プレゼンテーション①～⑨
第14回	まとめ「いのちとその定義」

3回の講義は教員が担当し、プレゼンテーションは履修学生が分担して行う形式をとる。小規模教室を用い、毎回、机をロの字型に移動させ、机の上にはネームプレート掲げて、教員も含めた全員が対面するかたちをとっての授業展開をする。数回のうちに学生はほぼ定まった座席に着くようになるが、プレゼンテーション担当学生だけは指定座席を設けている。プレゼンテーション担当者には、発表レジュメと資料を準備し全員分コピーしてくることを要求し、時間の関係から、始業ベルが鳴り終わるまでにはそれらをそれぞれの机の上に

配置しセミナーを定刻に開始できるようにしている。

セミナーでは、履修学生は次のことがらが要求され、これらは成績評価とも連動する。

- ① 原則としてすべてのセミナーに出席し、途中放棄をしないこと
- ② 「発表題目（案）」および「基本構想」の提出
- ③ プレゼンテーション（発表 20 分、ディスカッション 20 分、コメント記入 5 分）
 - （ア）発表レジュメ、参考資料の準備（視聴覚資料も使用可）
 - （イ）ディスカッションへの積極的参加（毎回 1 回以上の発言）
 - （ウ）他のプレゼンターへの批評コメントの提出
- ④ 期末レポートの提出（プレゼンテーションと批評コメントを土台にし、設定したテーマについて個別レポートを作成する）

フレッシュャーズ・セミナーではカレッジ・スキルの習得（「基本的な技法」「学問的な作法」）も一つの課題と考えられているが、レジュメやレポートの作成の仕方、文献資料の収集方法などは、その都度気がついたときに細かな点も含めて申し伝える。近年、ウェブサイトからの資料収集を行い、無感覚でコピー&ペーストをしてレポートを作成する学生をしばしば目にすることがある。このセミナーでは、インターネット資料の信憑性やその取り上げ方についても可能な限り注意を促している。

高等学校までの段階でディベート授業を経験してきている学生は、実際はごく少数に過ぎない。ディスカッションへの関心は高いものの、ほとんどの学生はその経験が少ないために、最初はある程度のガイドをしてあげなければ、戸惑っているうちにディスカッションの時間が終わってしまうことになる。自分の意見をもつことができなかつたり、自尊心の低さから自己表現への躊躇が見られたりすることもある。また自分への非難を恐れるばかりに他者を批評することをしない傾向が見られ、ディスカッションを引き出す難しさをしばしば感

じさせられる。はじめの数週間は、担当者がディスカッションをリードする。プレゼンテーションを受けて、ときには全員に共通質問を投げかけて順番に発言させる方法をとったり、発表方法に関するコメント、語句や内容の確認、印象批評、質問、類似体験の紹介などについて指名して発言を促したりすることもある。またあえて逆説的な問いを投げかけることによって学生たちを刺激し、発言を引き出すことも試みる。たとえば世界の食糧問題やエネルギー問題と人口問題の関係について議論しているときに、「これほどに世界が人口問題に直面しているというなら、持続可能な世界をつくるためには、むしろ戦争や紛争を積極的に容認したほうがよいのではないか、難民支援なども積極的に打ち切ったほうがよいのではないか」と問いかける。すると、「戦争を推奨することなどできない」「強い者だけが生き残る世界は何かが違う」といった意見がぼつぼつと出始める。プレゼンテーションを通じて、互いの盲点を指摘し合ったり、問題の所在や本質に気づくようになると、学生たちの目は輝き始め、ディスカッションにどんどん引き込まれていくが、そこに至る前後で時間切れになってしまうことも多い。それでも毎回こうした作業を積み重ねるうちに、担当教員のモデレーターとしての役割は次第に軽減されていく。

これまでセミナー受講生が各自でテーマを定め、個別に調査や発表の準備を進めてきたが、2009年度前期は試行的にグループ・ワークを取り入れた。関心や問題意識の近い学生2～3名をマッチングさせ、テーマの決定、発表準備、プレゼンテーションに至るまでグループ作業として展開させてみたところ、予想以上のよい収穫を得ることができた。テーマや発表内容が洗練され、ほどよい緊張感と責任感のなかで、学習モチベーションが高まり、質の高いプレゼンテーションの展開がなされるようになった。また残念なことに、これまでは第一志望で応募し、選考されて履修することになった学生でありながらも、プレゼンテーションの準備が追いつかなかったり、動機付けを維持し続けられなかったりすることにより欠席しがちになり、途中棄権する学生がわずかにいた。しかしグループ作業を行うようになって、途中で履修放棄する学生がいなくなったことは、副産物として注目してよい。グループ作業を通して、互

いに刺激し合い、共に学ぶことへの意義を感じとり、専門分野の学問の学びにつなげて行ってほしい。

3. 学生の関心と反応

実際に学生たちが取り上げたトピックのうち、いくつかそのタイトルだけを紹介しておこう。(2008～09年度)

- ◆ 自殺はゆるされる行為か
- ◆ デートDVをについて
- ◆ 未成年による人工妊娠中絶
- ◆ 安楽死と尊厳死：死ぬ権利・死なせる権利
- ◆ 死と向き合い、生を考える～ホスピスでのインタビューから～
- ◆ 戦争はどうして起こるのか～原爆のもたらすもの～
- ◆ 従軍慰安婦問題について
- ◆ 赤ちゃんポストをめぐる
- ◆ 少年兵～ウガンダの子どもたち～
- ◆ ストリート・チルドレンの実態とその将来
- ◆ 人身売買～取引される子どもたち～
- ◆ ヒトはなぜヒトをいじめるのか
- ◆ 生きる意味と鬱病
- ◆ 宗教といのち

ほか

これらは一部にすぎないが、学生たちが取り上げるトピックは、いずれも「いのち」を考察する上で重要なものばかりである。専門科目ではないので一つ一つの課題について専門的に掘り下げることを目指してはいないが、「いのち」について考察する上での基本的知識は押さえておきたい。仲間の発表を通して新しく得る知識や感覚は非常に大きく、発表者と聞く学生が互いに緊張感をもって毎回のセミナーに臨むことができている。そうして受講生がある共通基盤に立って問題の所在を探求し、「いのち」をめぐるディスカッションをよ

り深めていくことができるのである。

このセミナーを受講して学生が率直にどのようなことを感じ学びとっているのだろう。期末レポートの終りに記された「感想」「あとがき」から一部を抜粋してみることにしよう。

「自殺」をテーマに取り上げた学生：「このセミナーを通じて、臓器売買や児童売春など世界の子どもたちに起きている恐ろしい実態について学んだ。生きたくても生きられない子どもがこの世の中にはたくさんいるのに、自分から命を絶つことは何としても避けなければならない。人が発する自殺のサインや自分にできることを学んだ今、周囲の人たちの自殺は防ぐことができるはずだ。(中略) 今回のこのフレッシュャーズ・セミナーでは、普段なかなか考えることのない命について考え、様々な学部の人と意見を交換し合うという本当に貴重な経験ができた。ここで終わらせるのではなく、このセミナーで新たに興味をもった分野についても調べを進め、今後も命について考えていきたい。」

「子どものエイズ・人身売買」をテーマに取り上げた学生：「人の命を意味を考えてもなかなか答えが出ず、考えれば考えるほど深みにはまって抜け出せなくなるし、私たちにできることなんてちっぽけ過ぎると毎回の話し合いの中で感じました。しかし、実際にこのような事実があること、いま私たちが平和に暮らしている間にも消えていく命があること、生きたいと思っても不当な理由で命を奪われている人がいることをまず知ることが、私たちが最初にできることです。そしてそれを知った上で、幸運にも平和に暮らしているこの日々を毎日悔いのないよう一生懸命生きることが、今のわたしの生きる意味だと思います。生きていること、それだけで幸せなんだとこのセミナーで改めてひしひしと感じました。この感じたことをずっと忘れてはならないのだと思います。」

「ストリート・チルドレン」をテーマに取り上げた学生：「世界の子どもたちに対してできることは何かを考えると、たいていの人は募金活動や食糧援助という物質的なものを提供することを思いつくだろう。だが一番してあげなければならないのは、まずそうした子どもたちがいることを<知ること>だ

と思う。人は孤独では生きていけない。自分はここにおいて明日に向かって生きていることを誰かが知っているなら、人は生きていけるのではないだろうか。そして私たちにはその義務がある。私たちが知ることで、世界の多くの幼い命は救われていくのだ。」

こうしたテーマを半期の学びだけで終わらせるのは、どうしても時間的制約から中途半端になりがちであるが、学生たちにとってこのセミナーが、大学で学ぶことの意味と目的を見つけ出すきっかけになり、その後の学びを豊かにするものになることを願わずにはいられない。

青山スタンダード科目やフレッシュャーズ・セミナーの理念の中には、「知のマップ」についての言及がある。「知のマップ」を獲得するための大事な作業の一つとして、自己の立ち位置を捜し出すことがあげられよう。地図を読めない人というのは、そもそも地図上で自分の現在地を発見できずにいる。目的地が見えていても、自分の居場所が分からなければ、進む道筋を確定することは不可能であろう。それと同じように、学問は、その進むべき方向性を定めることももちろん大事であるが、自己の立っている場所を確認することもそれ以上に重要である。つまり青山スタンダードやフレッシュャーズ・セミナーの働きは、自己のパースペクティブの確立、堅固な価値観の形成にあり、人間や世界の読み方の育成にあると言ってよいのではないだろうか。現実の世界地図の中のわたしの位置が見えなければ、倫理基準も学問もただ闇雲に徘徊するだけで、根なし草の雑学に終始してしまう。

とりわけ本学においては、キリスト教信仰やキリスト教倫理を学問的基盤として掲げられることは幸いなことである。学生たちがキリスト教信仰を倫理基準にするかどうかは別にしても、世間一般の雰囲気（風）や慣習とは異なる明確な倫理基準を提示することができるキリスト教信仰は、研究態度や価値観にチャレンジし、学生たちの価値観形成にも影響を与えることになろう。とくにいのちの問題は人間存在の根源的な問いであるため、目に見える生命の現象を越えて宗教的生命観が不可欠となろう。ディスカッションが進んでくると、担当教員も参加者の一人としてディスカッションに加わり、キリスト教信仰やキ

リスト教倫理の視点からの発言をして、学生たちと共に課題に取り組むようになる。

このセミナーのキーワードの一つは、「コンフリクト」である。いのちの現実直面する中で、世界の中でどのようなコンフリクトが起こっているのか、自己の中でどのようなコンフリクトがあるのかと自問自答しながら、コンフリクトの所在に気づくことによって受講生一人一人が問題意識を覚醒させられ、自らの生き方に積極的に挑戦する者、ひいては社会や文化構築を責任的に担う者になっていくことが期待されている。

4. 「わたしのため」から「だれかのため」に生きる力の形成

「いのち」をテーマにして考える場合、それぞれが研究するテーマや内容は、決して単なる雑学教養で終わらない。教養教育を雑学教育と考えたり、知識の集積が人の徳を高めると思ったりする人々もあるが、人や社会が生きていくための力になっていかなければ、それは真の教養とは言い得ないだろう。少なくとも青山スタンダード科目のねらいは、青山学院の教育方針や理念に即して考えるなら自己本位な人間形成ではなく、すべての人と社会に対する責任を担いよう知識や教養を習得することにある。したがってフレッシュャーズ・セミナーもまた「人類への奉仕を目指す」ことに主眼が置かれる。

「いのち」を思考するときには、人間の内側にある感情的なものを無視できない。ディスカッションの際は、「いのちの実態」（具体的諸課題）に触れたのち、いつもまず学生たちが感じた印象を率直に言語表現することから始める。感情だけで学問は成り立たないが、パッションから導き出される学習動機付けは、学生たちの知的好奇心に根拠を与えることになる。数値データから社会を見ていくことも必要だが、そこからは人々の悲痛な叫び声が直接聞こえてくることは少ない。いやむしろ数値データだけを眺めても、内的訓練が積まれている者であれば、そこから苦しみや嘆きの声を聞き取っていくことが可能になるのだろう。ロバート・ペラーの言うところの「心の習慣」である。心の習慣は心の訓練によって形成されていく。

ゲームやインターネットの普及によって現代人は他者の痛みに鈍感になっているとしばしば指摘される。現代の子どもたちは、現実とヴァーチャルの区別がつかないのだと、発達過程が問題視される。しかし物事の本質を見極めようとする訓練を積み重ねることによって、他者の痛みに敏感になっていくことは、大学生になってからでも遅くはない。そこに、大学におけるリベラル・アーツ教育の一つの使命がある。

この「いのちの倫理と生きる意味」セミナーもまた、他者の痛みに目を向け耳を傾ける習慣を身につけることを射程に入れて考えている。世界の不合理な現状に悲しみや怒りを感じ、その感情を自己表現し、その感情もふくめて自己省察する。また問題の打開に必要なことは何であるかを捜し出し、それぞれの学部専門の学びに結び付けていく。そうすることによって、自己のためではなく他者のために学問をすることの意味と価値とに気が付いて欲しいのである。キリスト教信仰の立場から言うなら、あらゆる「いのち」は創造論的秩序の中におかれているのであって、いのちは存在の所与に対する驚きの感受性を磨くことによって輝き始める。こうした感受性なしにいのちの倫理は成立し得ないのである。

半期という短い期間であることから、おのずとフレッシュャーズ・セミナーにできることの限界を承認せざるを得ない。しかし学生たちには、大学で学ぶことの意味についても「いのち」の使い方（使命）との関係から考えていって欲しい。戦後教育は、国民が国家のために生きるのをやめ、自主独立に生きることが可能にさせた。一人一人が自己実現の権利を有するが、その代わりすべてが自己責任のもとに置かれ、そこでの教育の役割は、自由主義競争社会で勝ち越して、上手く生き延びていくための術を身につけさせることであった。つまり自分のために生きることが大事な権利と目的として理解されてきたのである。いまでは個人主義が際限なく進み、「自分のためだけ」に生きる者が増強しつつある。大学への進学、そこでの学び、就職活動も、すべては自己目的を達成するための手段であって、人は、それぞれに自分の幸せを追求しようとするのである。

しかし、今日の大学人には他者への注意をどれだけ払うことができるかが問われている。むしろ他者に注意を払い、他者のために生きるときに自己存在の意味が見出され、グローバル時代の文化形成がなされていく。フレッシュャーズ・セミナーはつねに既成文化や既成感覚への挑戦的批判的精神と、文化形成的・文化創造的要素の両者を兼ね備えていたい。つまり学生たちが、「わたしのため」ではなく「だれかのため」に生きる力を形成することに寄与すべきものと考えたい。それはすなわち、学生たちがグローバル世界の隅々で起こっていることがらに敏感に反応する感受性を身につけ、問いをもつことができるという「注意を払う (paying attention)」態度の育成のことである。

死生学者アルフォンス・デーケンが、「人は自分のために生きるのをやめるときに自分の人生の意味が見えてくる」と述べているのは興味深い。フレッシュャーズ・セミナーが、その理念と目標を繰り返し確認しつつ、人と社会に奉仕する「地の塩、世の光」を目指した教育展開がなしていくことに、またフレッシュャーズ・セミナーを通して学生たちがより広い世界観を身につけ、愛と奉仕に満ちた生き方を探求していくことに、今後大いに期待を寄せていきたい。